

---

# 愉快な魔術師たち

knight

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愉快な魔術師たち

### 【Nコード】

N2559Z

### 【作者名】

knight

### 【あらすじ】

交通事故で死んだ少年…姫小路 春臣

しかし目の前の天使によるとそれは手違いだった。

これは、異世界の公爵家に転生した少年の物語。 + + +

+ + 処女作ですどうか暖かい目で見守ってください。

## エピソード

ああ、僕死んじゃうのかな。

姫小路 春臣は、死を覚悟していた。だってトラックがもうすぐそこまで来ているのだから。

でも後悔はしていない！

これあの少女は、助かったのだから。

「頑張ったんだから来世は、もっと長生きさせてね。カミサマ……」

次の瞬間、凄い衝撃を受けて春臣の意識は、闇に消えた。

「はじめまして。私が今回あなたを担当する天使のイカレ帽子屋です。以後、お見知りおきを。」

イカレ帽子屋マッドハッターと名乗った天使は、ニコやかに握手を求めて手を出した。

「ああ、どうも……」

春臣は、反射的に手を出して、握手に応じた。

ここは、どこだ？

辺りを見渡してみると真っ白い空間がずっと先まで続いている。噂

に聞く天国と言つところだろうか？

「君は、姫小路 春臣君。享年15才の日本人ってここで間違いないかな？」

「ええ、はい、そうです。」

天使は、メモ帳に目を落としながら確認してくる。

「あのお、僕も一つ確認してもいいですか？」

「はい、いいですよ。なんででしょう？」

「ここは、天国ですか？」

「まあ、人は皆さんそうよんでいますね。」

やはり天国だったのか。

と、言うことはあの時ぼくは、死んだのか…

「はい、そのとおりあなたは、先程天に召されました。」  
心を読まれた！？

「あとその事について我々は、あなたに謝らなくてはいけません。」

「謝る？」

天使は、先程までのニコやかな表情とは違いバツの悪そうな顔をしている。

「はい、実はあなたは、こちらの手違いで死んでしまったのです…」

「どづゆづこと?」

「今日死ぬ予定だったのは、あなたが助けたあの少女だったのですが、手違いであなたが死んでしまったのです。」

「そんなあ」

確かに少女を助けたのは、僕の意識だったけど、それが「手違いでした」なんて悲しすぎる。

「しかし!そんなに落ち込まなくても大丈夫ですよ。」

落ち込んでいる春臣に天使が明るい声で話しかける。

「我らが主は、あなたの行いをちゃんと見ていました。あなたが少女を助けて死んだことや、こちらに非があったことをかんがみて、なんと!あなたは、輪廻転生の輪に入ることなく直ぐに転生出来ることになりました。」

パチパチパチパチと拍手しながら、まるで春臣が何かに当選したかのようにつげた。

「更に、主のご厚意で春臣君には、かなり自由な選択肢があたえられます。よかったですね。」

「自由な選択肢?」

「具体的には、生まれや容姿あとは特技や才能などですかね。」

「マジで?」

思わず目を輝かせる春臣を見て天使は、思わず微笑む

「マジもマジ大マジですよー。まあ、とりあえず希望を言ってみてください。」

ダメなものは、無理と言いますんで。」

「それじゃまず、家族は両親がそろって結構長生きしてくれると嬉しい。あ、もちろん僕も長生きしたいです。あと兄弟もほしいかな。」

「ええっと、ちょっと待つてくださいね。」

天使は、持つてるメモ帳にさらさらと書き込んでいく

「はい、良いですよ。家族欄はオツケーです。他には？」

「あとはまあ、容姿は不細工にならない程度でお任せをお願いします。家も同じように貧乏にならない程度でおまかせで。」

「あれ？そんなんで良んですか？もつと凄じいこと要求したい方が良いじゃないですか？」

要求ってそんな誘拐犯みたいな言い方だなあ。

「良いんですよ。それぐらいで、あと特技とか才能ってたたとえばどんなのですか？」

僕の問いに少し考えてから天使が答える。

「まあ、天才的な頭脳や運動神経あとは、美術など芸術の才能なん

かですかね。ああ、異世界を選択されるのでしたら剣や魔法なんかも……」

「魔法!？」

そうゆって天使の言葉を遮る。なにを隠そう、僕は魔法とゆうものにずっと憧れているのだ。廚二病じゃない中学生なら普通の反応だ。

「それ!!魔法使いになりたいです」

僕は、天使の肩に手をおいておもいつきり身体を揺すった。

「分かりました。分かりました。でも魔法は、向こうの世界では、誰でも使えるモノなので「魔法を使えるようにする」は、特技になりません。」

「あれ?そうなの?」

僕は、天使の肩から手を離しながら問い掛けた。

「ええそうです。凄い魔法使いになりたいと言うのでしたら。魔力魔法、精霊魔法、降霊術、これらすべてを使えるようにすることも出来ますよ。」

「じゃあ、それをお願いします。」

「わかりました。」

天使は、メモ帳に「魔法系全体の才能」と書き足した。

「はい、これで一樣すべての欄がうまりました。」

あなたの転生さきは、剣と魔法の世界>クロテスマイア<です。じやあ早速、転生しましょう。」

天使が、バチンと指を鳴らすと、何も無い空間から首吊り用の縄が垂れ下がった。

「これに、首を吊っていただければあとは、自動的に転生さきの世界にお送りいたします。」

「わかりました」

僕は、少し緊張と首を吊ることへの恐怖が入り交じった不思議な気持ちを抱きたがら首を吊った。

想像してたのと違うな、もっとと苦しいと思っていたのに。

「あ、そうそうあちらの世界は、主と聖霊の加護を強く受けている世界なので天使である私とも会うことがあるかも知れませんね。」

「本当に!?!どこに行けば会えるの?」

この天使にはできればまた会いたいな

「不思議の国ですよ。あなたの生活が落ち着いたら使いを出します。まあ、来ればいつ来てもいいですよ。どおせいつもお茶会をしますからね。」

「じゃあそろそろ逝きますか?」

「うん、お願い。」

「では、第二の人生楽しんで下さいね。」

その言葉を最後に春臣の意識は再び闇に消えた。

「逝きましたか…」

マッドハッター

一人になったイカレ帽子屋は、春臣が消えた場所を見つめていた。

「次に会うときが楽しみですね。」

私は、懐から銀時計を出して時間を確認した。

「おっと、もうこんな時間ですか。早くしないとお茶会に遅れてしまっ  
まっ」

銀時計を懐にしまい光の中に歩きだした。

「また会おう。少年…」



## 第一話 転生（前書き）

今回は、短めです。

## 第一話 転生

「アルバス様」

パンツ！！

と音をたてて部屋の扉が勢いよく開いた。

扉を開けたのは、20代後半とおぼしき女性：子守りのアニーだ。

「お生まれになりました！！」

その言葉を聞いたとたんにアルバスは、部屋を飛び出した。

+ +  
+ +  
+ + + +

妻の居る部屋を目指して、月明かりがてらす廊下を走っていると、廊下の奥に小さな人影があった。

その人影は、妻の部屋に入りたいのかドアノブに手を伸ばして居る。

「まだ、起きてたのか？」

ヴァン。」

アルバスは最愛の愛息子 アイヴァン に喋りかけた。

するとヴァンは、よほど驚いたのか一瞬飛び上がりそのまま尻餅をついた。

「お父様……」

脅かさないで下さい……」

「すまんすまん。赤ちゃんを見に来たのか？」

アルバスは、「立てるか？」とヴァンに手をかしながら問い掛けた。

「はい、鳴き声が聞こえて来たので……」

「そうか。じゃあ一緒に見に行こうな」

ヴァンの両脇に手を入れて抱き上げる。

そのままドアを開けて部屋に入った

「旦那様、アイヴァン様も。おめでとございます。元気な男の子ですよ。」

部屋に入ると、助産師のマリーが迎えてくれた。

「ああ、妻は？」

「はい、妻子共に健康そのものですよー！」

その言葉に胸を撫で下ろしながら妻と息子の眠るベッドにちかづく。  
息子はベッドですやすや寝息をたてながら眠っている

無事に転生できたのかな？

赤ん坊の中で覚醒しつつあった春臣の意識はそをな事を思っていた。

+ +  
+ +  
+ + + +

（暇だ…暇すぎる……）一体、転生してからこの事を考えるのは、  
何回目だろうか？

でも、仕方がないのだ。

本当にやることなく、暇なのだから。

本を読んだりしてこちらの世界についていろいろ調べたいが

さすがに、赤ん坊の状態で本を読むわけには、いかないからなあ。

しょうがない。

今、わかっていることを整理しよう。

とりあえず。

イカレ帽子屋マッドハッターが言っていた通り僕は、異世界に転生した。

えっ？

何でわかるのかって？

それは、お母さんやら仕様人やらが、家の中で当たりまえの様に魔法を使っていたからさ！！

ちなみに、今の僕の家族構成は……

お父様

名前は、アルバス・フォン・ムーンストライト

金髪碧眼の美形外国人。

年齢は、20代前半

結構な親バカだ。

お母様

名前は、イリア・ムーンストライト

銀髪碧眼の美人外国人。

年齢は、お父様と同じで20代前半

お兄様

名前は、アイヴァン・ムーンストライト

愛称は、ヴァン。

お父様と同じ金髪碧眼の美形外国人

僕くより4才年上でよく遊んでくれる。

優しいお兄様だ。

お姉様

セシリア・ムーンストライト

お父様と同じ金髪碧眼。

かわいい顔しているからえそおそらく将来は美人になるだろう。

僕より2才年上でお兄様と一緒によく遊んでくれる。

あとは何人かの仕様人がいる

（そろそろ眠くなってきたなあ）

赤ん坊の身体だからいろいろ不便だと感じながら

僕は、睡魔にまかせて意識を手放した。

## 第二話 魔法と魔術

僕が転生してから3年がたった。

この3年間でさらにわかったことが、幾つかある。

まずは、僕の新しい名前。

レイジャック・ムーンストライト

みんなは、僕のことを愛称でレイと呼んでいる。

当たり前だが、容姿は違う。

髪の色はお母様と同じ銀色瞳も、なぜか家族の誰とも違う銀色だ。

顔は、「おまかせで」と言ったのに凄く整った顔立ちになっていた。

あとは、僕の家について。

僕の新しい家は、四大公爵家と呼ばれている名門貴族の一角。

12代続く魔導の名家。  
ムーンストライト公爵家。  
やけに大きな家だと思っていいたら貴族だった。

ほかの四大公爵家は

武道の名家

ローゼンクロイツ公爵家。

知略の名家

マグス公爵家。

騎士の名家

ナイトレイ公爵家。

何でも約100年前にこの国…ランドール王国  
を救った英雄達なのだそうだ。

今、僕は屋敷にある書齋で本を呼んでいる。

タイトルは、『ランドール王国の全て』

子供むけの優しい読みものだ

その本には、この国と世界について色々なことが書いてあった。

まずこの国は、一番上に

王、その下に四大公爵家、王侯貴族、貴族、平民、奴隷と続いている。

（こうしてみるとこの家、結構偉かったのか……）

この国は、世界最古の民『ランドールの民』が作ったとされる国で王族の血には、創造主の血が流れていると言われている。

世界最大の大陸 ガルガシア大陸の北に位置し。

国土は、ガルガシア大陸に7万平方キロメートル。

大小17の浮遊島に31万平方キロメートル。

合計38平方キロメートル。

文字通り空に浮かぶ国。

魔法科学先進国で、輸出によって国益を得ている。

王都とその隣にあるムーンストライト公爵領 学術都市アドルフ  
ーナ

は、一番大きな浮遊島ー本島ーにある。

「レイー、何してるの?」

「うわっ」

僕は、後ろから衝撃を受けて前にのめりに倒れた。

「痛いよセシリーお姉さま。」

後ろからの衝撃の正体は、僕の2才年上の姉：セシリア・ムーンズ  
トライトだ。家族からは、愛称でセシリーと呼ばれている。

「ごめんね。何してるの？」

「ご本を読んでいるんだよ。」

そう言っ僕は、読んでいた本を持ち上げた。

「また勉強？あたしと一緒に遊ぼうよー」

「遊ぶ？確かお姉様は、今の時間…」

そこまで言ったところで書斎の扉が、いきよいよくひらいた。

「セシリア様！！」

「ア、アニー…」

入って来たのは、子守りのアニーだ。

「さあ！！お勉強の時間ですよ！！」

「いや…た、助けて〜」

そう言って嫌がるセシリーお姉様脇に抱えてずんずんと書斎を出ていった。

うちの家は、五歳になると家庭教師をつけて勉強させられる。セシリーお姉様は、ヴァン兄様と違い勉強が大嫌いによくああやって抜け出してくる。

（勉強かあ。僕も嫌だな。）

魔法は、早く習いたいが。勉強は出来ればあまりしたくない。

魔法と、言えば確かヴァン兄様が今日、庭でお父様と一緒に魔法の実習をすると言っていた。

転生してから、見た魔法といえば、お母様が掃除する時に少し使ったりするのを見たりしただけだから、魔法という魔法はまだ見たことがない。

いい機会だから少し見に行こう!!。

僕は、本を本棚にもどして書斎を飛び出した。

+  
+  
+  
+  
+  
+

庭に出るとちょうどヴァン兄様が魔法を使うところだった。

「火よ（マグナ）」

ヴァン兄様が小さく呪文を唱えると  
ポツと音を立てヴァンお兄様の手にはひが灯った。

「すごいよ！ヴァン兄様！！」

「あれ？レイ、何しにきたんだい？」

僕の突然の登場に少し驚いたようで、お父様には「遊びにきたのか？」と聞かれた。

「ヴァン兄様がまほうを使うところを見に来たんだよ！今のまほうは何？」

「今のは、魔法じゃなくて魔術だよ。」

あれ？『魔法じゃなくて魔術』？魔法と魔術は違うのかな？  
頭に？マークを浮かべている僕に、ヴァン兄様がさらに説明を続ける。

「『マグナ』…魔法語で、火を意味する言葉で文字通り火を起こす魔術だよ。まあ今は、火を起こす魔具が普及しているからあまり使われて無いんだけどね。」

いくら今使われていないと言っても、そもそも魔法自体存在していなかった世界から来た僕から見れば立派な魔法…いや魔術だ。

ちなみに魔具とは魔法科学の産物で魔力を動力に動く機械のことで、小さい物ではシャーペンのような魔具から巨大な飛空艇までさまざま種類がり、これのおかげこの国…と言うかこの世界は、前世の世界とおそろともまさらない科学力と文明を築いている。

「やっぱりすごいよヴァン兄様！もっとまほうのことおしえてよ」

「よし、それは、私が教えてあげよう。」

お父様は、ゴホンとせきばらいわしてから話し初めた。

「まず、魔法と魔術は厳密には違うものなのだ。魔法は、この世界の神が我々に伝えたもので、一番上から、五大魔法、上級魔法、中級魔法、下級魔法となっていて一番下級の魔法でも中級魔術と同じ位の、難易度があるんだ。」

そうだったのか。てっきり魔法も魔術も呼び方が違うだけで同じも

のだと思っていた。

「ごだいまほうつていうのは、何なの？」

「五大魔法というのは、別名”創世の魔法”と呼ばれていて、神様がこの世界を作った時に使ったとされている第一魔法から第五魔法までの、合計五つの魔法のことだよ。ただ…この魔法は他の上級魔法とは難易度が桁違いで、五大魔法を使える”魔法使い”は、世界に10人といないんだよ。」

「じゃあ、まじゅつは？」

「魔術は、昔の魔法使いがもつと簡単に使えるように作った物が始まりでそれ以降に作られた物は、全て魔術と言われているんだよ。」  
「そうだったのか。つまり神様が作ったのが魔法、それをもとに人間の魔法使いや魔術師が作ったのが魔術と言ったことか。」

「まあ、魔法も魔術も術の発動方法は、一緒だから魔術師でも魔法使いでもなく生活の中で魔術を使っているだけの人たちは、何時しかその区別をしなくなりその2つを合わせて今は、魔法とよばれるようになったんだ。」

「そうか、じゃあヴァン兄様や魔法使いじゃあ無いほとんどの人が使っているのは、魔術と言ったことか。」

「魔法には、さまざまな種類があり一番基本の五大元素：火、水、土、風、エーテル、あとは、火の発生の焔や水の発生の氷、風の発生の雷などいろいろある。その他、精霊

魔法に召喚魔法、特殊魔法などがあるが。

まあこれらは才能によって左右されるものの、努力次第である程度は、どうにでもなる。だが、降霊術だけは素質が無いとどうにもならない。」

「こうれいじゅつ?」

聞き慣れない言葉に思わず聞き返してしまっただが、たしか転生する前にイカレ帽子屋マッドハッターが言っていたような気がする。

「降霊術とはこの世界と繋がる異界…すなわちそれは、我々が言う天界であり神界であり魔界、さらには英雄達が死後その身を聖霊の位にまで高められ英霊として座るとされる至高の英座。

人間を遥かに凌駕する天使、聖霊、悪魔、英霊、などの存在をこの世界に降ろし契約して力を借りる術。

それが降霊術だ。」

なるほど説明を聞く限りではすがそうだ。イカレ帽子屋マッドハッターが言ったことが本当なら僕も使えるはずだ。

この国の貴族は総じて魔力が高く、この家はその中でも魔導の名家…最も魔法の恩恵を受けていると言われているのだからお父様も、使えるのだろうか？

「お父様は、こうれいじゅつを使えるのですか?」  
直接聞いてみた。

「ああ、お父さんも契約しているよ。今度機会があれば見せてあげような。」

やっぱり使えるのか。

しかし、ここまで魔法のことを聞いたら俄然魔法を習いたくなって

しまった…

こうなればやることは一つ！

「お父様、僕もまほうが習いたいです。」

必殺おねだり攻撃。親バカのお父様は、これでほぼ落ちる。

「魔法？うんレイには、まだはやいかなあ。」

あれ？おかしいなあ。いつもは、これで落ちるのに。

「おねがいです。お父様。」

さらに上目遣いでたたみかける。

「うう。でもやはりレイにはまだ早いな。もう少し大きくなったら教えてやる。」

あのお父様が、断ったのだから何か理由があるんだろう。

今回は、諦めることにした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2559z/>

---

愉快的魔術師たち

2011年12月11日22時55分発行